

新 歌人群像

安立スハル

孤高、豊饒

狩野一男

伝説の歌人

たしか一度だけ生安立スハルを見かけた記憶がある。昭和五十二（一九七七）年十一月八日、宮柵二先生の歌碑除幕式が郷里の新潟県堀之内小学校で行われた。その時、安立さんも出席していた。お祝いの言葉を述べる安立さんを末席から、近寄りがたく眺めていた。たったそれだけの記憶である。

きわめて珍しい名前に情報の少なさも加わって、生前から、ぼくなどにとっては謎めいたミステリアスな存在であり、なかば伝説の歌人という印象が強かった。

平成三（一九九一）年に発表された著者の自筆年譜などを参考にしながら、安立スハルの一生を先ず、整理しておこう。

安立スハル（あんりゅう・すはる）。ペンネームではなく本名である。大正十二（一九二三）年一月京都生まれ。父は画家。昭和十四（一九三九）年、病気休学中に作歌を開始。十五年、京都府立桃山高女を卒業後、大丸京都店人事教育部に勤務したが、肺結核再発のため静養。十六年、「多磨」に入会。十九年、伏見警察署の書記となる。二十年、父の病没に遭う。二十一年、警察を辞め洋裁店を開業



するが、三年余りで挫折、廃業。二十四年、初めて宮柁二に会い感銘、指導を受けるようになる。同年、持病の肺結核が悪化し、以後、二十数年に及ぶ療養生活に入る。二十七年、京都から岡山に移住。二十八年、宮柁二創刊の「コスモス」に参加。三十一年、第三回コスモス賞受賞。三十九年、第一歌集『この梅生ずべし』出版。四十二年から八年間「新潟日報」の歌壇選者を担当。五十一年、大阪読売新聞の「よみうり歌壇」選者となる。

平成三年に書かれたにもかかわらず、昭和五十一年以後の記述がないのだ。遺族から提供された資料によれば、若年の頃にもまして過酷な日々の連続であったようだ。六十年以降、母親の介護に専念するため、執筆活動を自粛。平成九年に妹に先立たれ、十一年には長く看取った最愛の母を失う。悲嘆のうちに自身もヘルペスにかかり、次いで十四年春、慢性呼吸不全、糖尿病性昏睡により倒れて入院。それから約四年「沈黙の生」を生き、しかしついに意識の回復をみることなく、平成十八（二〇〇六）年二月二十六日、生涯独身のうちに帰らぬ人となった。八十三歳だった。

人間探究派

『この梅生ずべし』は、安立スハル生前唯一の歌集である。昭和二十四（一九四九）年から三十七年まで、年齢でいえば二十六歳から三十九歳までの作品四百十三首を収める。

神は無しと吾は言はねど若し有ると言へばもうそれでおしまひになる

馬鹿げたる考へがぐんぐん大きくなり
キャベツなどが大きくなりゆくに似る

金にては幸福は齎されぬといふならば
その金をここに差し出し給へ

努力さへしてをればよしといふものにも
もあらずパセリを刻みつつ思ふ

自動扉と思ひてしづかに待つ我を押し
のけし人が手もて開きつ

安立の代表歌と考えられる、広く知られた作品を選出した。ユニークな発想、卓抜な比喩、男性的な量感の大胆な文体。病床に過すことの多かつた個人の狭い生活環境に取材しながらも、その作品世界は、独創的な広がりや思想的、哲学的な深みを持っている。さらには、皮肉なユーモアを湛えた箴言性を帯びているのも特長といえよう。

安立は、フランスのモラリストたち、モンテーニュ、パスカル、ラ・ロシュユフコーなど

の作品が好きで、二十代のはじめから愛読している、ある座談会で語っている。つづけて「私はやはり人間性の追求という方向に進んでゆくだろうと思いますね。（中略）人間に如くものはないと思いますね。私は人間が好きです」とも発言している。孤高な人間探究派・安立スハルの面目躍如たる五首である。師宮柁二もこの点を看破しており「執着して人間を考え人間を見ている、といった作品が多い」と述べている（本歌集の帯文「安立スハル」ノート）。そういえば、

わがまぼろしの中に歩めるモンテーニ
ユは帽子をあみだにかむりつつ行く



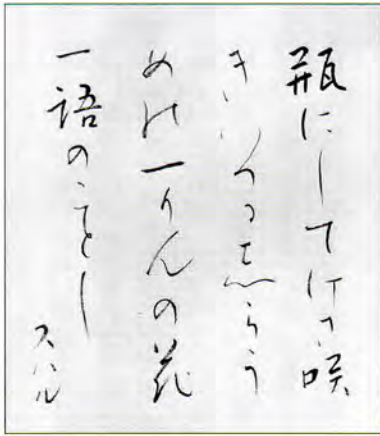
師・宮柁二（左から三人目）を囲んで。宮の左隣がスハル。（1963年11月、大阪・上本町の浪速荘前で）

安立スハル

という作品を歌集の巻頭に著者は据えたのであった。一冊のみのこの歌集によって、安立スハルは現代短歌史の上に確固たる位置を獲得したのである。

全歌集の刊行

安立スハルが逝って一年。このほど全歌集が刊行される運びとなった。題して『安立スハル全歌集』。内容について若干説明しておきたい。全体を「この梅生ずべし」と「この梅生ずべし以後」の二部に大別した。「この梅生ずべし」は歌集『この梅生ずべし』を忠実に再現したものである。ただし、漢字は原則として新字体に改めた。「この梅生ずべし以後」は歌集『この梅生ずべし』以後に発表された作品を年代順に収録したものである。



スハル直筆の色紙。

すなわち、昭和三十八（一九六三）年から平成十二（二〇〇〇）年まで、年齢にして四十歳から七十七歳に至る所産三千余首を収めた。収集した作品は三千二百首を超えるが重複発表作、類似作等を丹念に点検、削除した結果の数である。年代順に並べるとともに、見開きページの左下側に年代を示した。これによって、いつの年代の作品であるかがわかる。年代は作品の発表年代ではなく、製作年代を表す。なお、年間の作品をいくつかの群に分けて小題を付した。歌集としての体裁を整えるためと、作品内容の区切りをわかりやすくするためである。

結局本書には、両者を通算して五十二年間の作品、約三千五百首が収載されていることになる。ほかに略年譜を付け、また巻末には初二句索引を設けた。初二句索引は、作品検索の便宜を考慮して、一首ごとの初二句を挙げ、全体を五十音順に配列して本書収録ページを示したものである。

安立スハルは、現代において特異な歌人のひとりといえるだろう。同時に、作品の真価が論じられにくい歌人のひとりであるともいえるだろう。本書の刊行によって、安立スハルという稀有な歌人の全貌がはじめて明らかになるはずである。ひとりでも多くの人々に

読まれることを、刊行に少しばかり関わった者として願っている。

師を歌う

ここからは『この梅生ずべし』以後の作品をたどってみよう。なにぶんにも歌数が多いので、とびとびに数首ずつ紹介する。吉野秀雄への私淑や、良寛への傾倒も知られているところだが、安立スハルが終生師事したのは宮柵二である。

師の精神こころに逢はむとぞして見入る国越
後堀之内に雪残りたり

冬霞ひかるほとりに啼いてゐる山鳩よ
知るか宮柵二亡し

わがよはひ七十五とは生きたもの宮柵
二より年上となる

宮柵二の眼玉が天の一角より睨みをる
ことわれを熱くす

師への敬愛の念をこのように歌っている。そのひたむきさに胸が熱くなるのである。若い日に『この梅生ずべし』の中で、

晩春の岡山駅に柵二先生を待つ間の長
く逢ふ間短し

と歌っていたのをあざやかに思い出す。

豊饒な抒情世界

瓶にして今朝咲きいづる白梅の一りん
の花一語のごとし

くちなはにくちなはいちご村の子に苗
代蓐赤らむ夏ぞ

胸中の地図をひろぐるひとり遊びに花
背峠はすぎ光れり

立ち憩ふ鞍馬のまなこ覗きみればとて
もかなはぬやさしさを待つ



大阪読売新聞文化講演会后、スハル（中央の白い服の女性）を囲んで。（1963年4月）

見たかりし山葵の花に見入りけりわが
波羅^{はらいそ}僧もここらあたりか

たちゆらく金の芒に思ふかな宗達の線
光琳の線

踏まれながら花咲かせたり大葉子もや
ることをやつてゐるではないか

大切なことと大切でないことをよりわ
けて生きむ残年短し

思いの深さ豊かさ、口語脈をとり入れた自
在な表現、格調高い韻律。まぎれもなく安立

スハルならではの世界だ。書き写しつつその
豊饒な抒情世界の展開に「作品には一種の光

茫があり、ある時は孤独で澄み、ある時は豊
かで活潑だ」という宮柊二の言葉（前出「安

立スハル」ノート）がしきりに思われるので
ある。そうしてやがて、心は歌を読むよろこ
びに静かに満たされていく。

母と娘

安立スハルの母を大切に思う気持ちは並大

抵のものではない。「私が殊に頭のあがらな
いのは母です。長い間の母の心労と看護を、

私は涙無しにはふりかえることができませ
ん」と『この梅生ずべし』のあとがきの冒頭

に記している。長く苦難を共にした母に捧げ
る娘の歌が多く見られる。

老い母につねに言葉をかくるべく仕事
机ともろともに寄る

「恐れ入ります」などと娘の我に言ふ老
者の母の足さすりつぐ

七十五が九十六を介護するかくありて
無事に生き延ぶるらし

「スハルですわかりますか」と問ふ我に
「わかります」と言へり生きてください

いわゆる「老老介護」の歌である。高齢化
社会の進行に伴い、高齢者自身が親や配偶者

を介護する「老老介護」の問題が深刻化して
いるが、これらは短歌に詠まれる先駆けとな

った作品である。痛ましい内容だけれど、し
かし、安立スハルはむしろすすんで肅々と歌

い尽くした。その必死な祈りと献身の歌の
数々は、読む者を揺さぶり、やさしく励ます
にちがいない。

死んでのち五十年ほどたつたころ残る

歌一首あらば幸せ

最後に、表現者の崇高な心意気を見事にあ
らわした一首を謹んで引いておく。

（かのう・かずお「コスモス」選者）